道徳のかけ橋

令和５年４月発行
第　２　６　号
福島県教育庁
義務教育課

道徳科の特質を踏まえた情報モラルに関する授業実践

社会の情報化が進展する中、子どもは、学年が上がるにつれて、次第に情報機器を日常的に用いる環境の中に入っており、学校や子どもの実態に応じた対応が学校教育の中で求められています。これらは、学校の教育活動全体で取り組むべきものですが、道徳科においても同様に、情報モラルに関する指導を充実する必要があります。

道徳科の特質を踏まえた情報モラルに関する授業について、一緒に考えてみませんか。

授業について

福島市立平田小学校　第４学年の授業より

指導者　鴫原 則子 教諭

○ **主題名**　自ら信じることにしたがって

○ **内容項目**　Ａ（Ｉ）〔善悪の判断、自律、自由と責任〕

○ **教材名**　「カマキリ」（出典：新・みんなの道徳４　学研）

○ **ねらい**　正しくないと考えられることを人から勧められる場面を役割演技で疑似体験をし、そのときの「ぼく」や「友達」の心の中を考えることを通して、よく考えて正しいと判断したことは、周りに流されないで行うことの大切さに気付き、自信をもって行おうとする態度を育てる。

○ **児童の実態**　学級で小さなトラブルが起きると、自分たちで話し合い、原因を考えたり行動を改めたりする姿がある。その中で善悪を判断する場面があるが、友達関係や自分の弱さから、正しい行動ができないこともある。また、正しくないという判断をして自分はその行動を起こさなかったとしても、友達の行動をとめることはより難しい。

○ **指導の意図（児童の実態を踏まえて）**

正しいことを行えないときの後ろめたさや正しいことを行ったときの充実した気持ちを振り返り、正しいと信じて判断したことを行おうとする態度を育てたい。

〈あらすじ〉

主人公の「ぼく」がインターネットを使う際、自分の判断は正しいと思いながらも周りの友達に流されて個人情報を入力してしまい、自分の行動に後悔の念を抱いてしまうという話である。

ここがポイント！　子どもが「問題意識をもって授業に臨む」ために

〈事前アンケート〉

〈事前アンケートの提示〉

〈事前アンケート〉

「正しいと思うことをいつでもしているか」について、心のものさしを使って事前アンケートを行いました。

〈導　入〉

アンケート結果を、一つの心のものさしに集約したものを提示しました。

「どうして正しいと思っても、できないことがあるのかな。」

「自分だけじゃない。」

「人によって位置が違うな。」

友達の考えや全体の傾向を知ることで、「善悪の判断」に係る子どもの問題意識が高まりました。そこで、本時の学習課題「正しいと分かっているのに…」が設定されました。

道徳は、教材の内容を理解させることに終始せず、教材を活用して生き方を学ぶ時間です。だからこそ、子どもが「問題意識をもつ」ことが大切になります。

道徳科の特質　ここがポイント！「多面的・多角的に考える」ために

主人公が友達とインターネットでカマキリを検索していると、先に進むためには名前を入れなければならない画面に遭遇します。授業者は、この状況を**役割演技で、疑似体験**をさせたいと考えました。ＰＣ上に、カマキリの画像や、「ご利用ありがとうございます。お名前をご登録しました。」という文章が並ぶ画面を作成し、臨場感のある状況を設定しました。

〈役割演技１回目〉　「ぼく」役：子どもたち　「友達」役：教師
〈役割演技２回目〉　「ぼく」役：Ａ児　「友達」役：Ａ児以外の子どもと教師

【評価の視点】　個人情報の入力をめぐる場面のぼくや友達の心の中について、それぞれの立場で考えている。（発言）

〈ＰＣに作成した画面〉

〈役割演技を通して考える姿〉

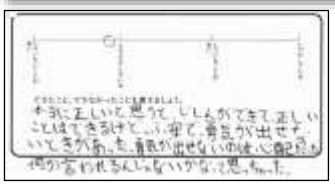
〈２回目の役割演技より（一部抜粋）〉
友達役：　早くやって、やって。（みんなで）
ぼく役：　見たくても無理。
友達役：　見たいなあ。見ようよ。（みんなで）
教　師：　すごい写真があるかもしれないよ。もっとすごい新聞ができるよ。（ゆさぶり）
(友達役)
ぼく役：　変な請求がきたら困るから、自分の気持ちを優先した方がいいな。
友達役：　いい新聞を作るって約束したでしょ。下の名前だけなら大丈夫だよ。大丈夫だよ（みんなで）
ぼく役：　ん…。
〈役割演技後に〉
教　師：　ぼく役のＡさん、やってみてどうでしたか。
ぼく役：　さっきまで、個人情報だからいけないと思っていたけれど、みんなに言われて、すごく迷った。まっ、いいかなって気持ちになった。
教　師：　周りにいた友達は、ぼくの心の中はどうだったと思いますか。
友達役：　だめって電源を切ったら嫌われるし、絶交される。嫌われたくないって思ったと思う。（続く）

単にＰＣ操作を目的として行うのではなく、役割演技を通して友達に勧められるとなかなか実行できない自分の心の弱さに気付くことができるようにしたり、役割を交代することでぼくと友達のそれぞれの立場から考えることができるようにしたりしていることが素晴らしいですね。

道徳科の特質　ここがポイント！「自己を見つめる」ために

「これまでの自分は、正しいと判断したことは自信をもって行っていましたか。」と投げかけ、心のものさしを使いながら、自己を見つめることができるようにしました。また、子どもにとって身近な友達関係や情報モラルに関わる経験を、具体的に想起できるような言葉掛けをしました。

【評価の視点】　正しいと判断したことを実行しているか、自分の生活を見つめ、振り返りながら考えている。（ワークシート、発言）



ぼくより小さい子に、「ろうかは走らないよ。」と、正しいと思ったことを言えた。

ぼくがまだ小学生ではないときに、友達がからかわれていて、ぼくは、助けたかったけれど、ぼくもからかわれたらどうしようと思って、自信をもてなかった。（続く）

授業者は、「できた体験」「できなかった体験」の両面について振り返るように促していました。具体的な体験と結び付けて考えることで、子どもたちは知的な理解に止まらずに、自分との関わりで実感をもって考えを深めることができていました。

道徳科の特質を踏まえた情報モラルに関する授業とするために

道徳科で行う情報モラルの学習は、**情報機器の使い方やインターネットの操作、危機回避の方法やその際の行動の具体的な練習を行う時間ではなく、**内容項目（例えば「礼儀」や「親切、思いやり」）について「自分はどうだろう」と自己を見つめることを通して、自分の価値観を明らかにしていく時間です。具体的に意思決定していく学級活動（２）の特質との違いを明らかにして授業をつくりましょう。

（学習指導要領解説ｐ９７参照）